

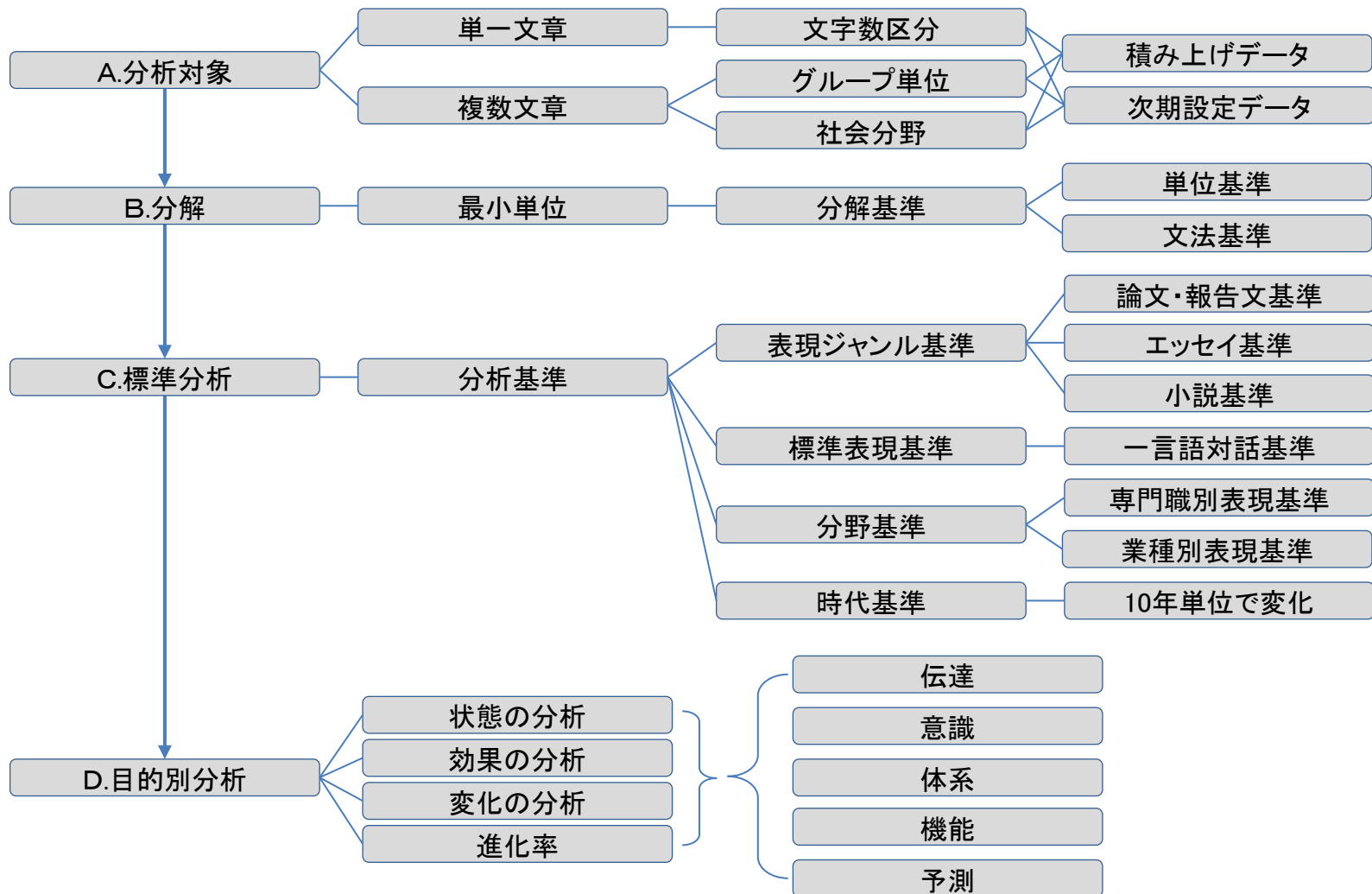
言葉を素材にした分析論

分解・分析手順

(株)シードウィン

言語分析プロセス

言語分析は分析対象から始まり、標準分析を行い、目的別分析へと進む。



日本語分析基準

文化の概念がある。日本だけを見ていると一つの国に一つの文化があるように見える。ヨーロッパの国々を見てみると、一つの国で一つの文化では収まらないようである。一つの国に言語が複数存在していて、複数の民族がいる。そこで一つの文化としてまとめてしまうのは無理があるようだ。政治で、権力で一つの国を作り得たとしても、文化や風習、習慣を一つにはできない。

民族と言語と国の組み合わせで文化があると見た方が適切だと推測する。さらに、地域の風土が関係しているかもしれない。同一言語で地域相関を調べてみる必要があるかもしれない。

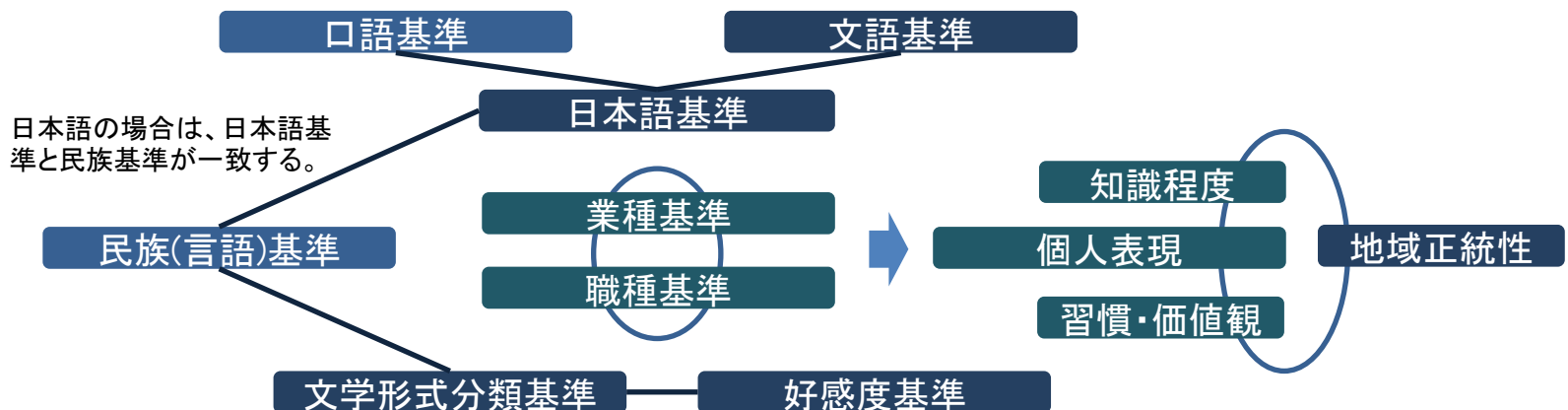
幸いにして、日本語は、一民族で、一国を形成している。歴史では、多言語が入ってきているが、日本語に同化している。

言語分析エンジンを創る最初が日本語であったのが幸いしたかもしれない。日本語を素材にした分析が、言語だけの分析ではなく、文化や価値観、慣習なども取り込める機会に巡り合っていたのだ。また、日本語分析エンジンを手掛けたとき、他の言語分析を参考にしなかったのも幸いした。複数民族、複数風習を持つ、言語を扱わなかったために、言語の執着せず、言語を人が使う言葉として扱えた。

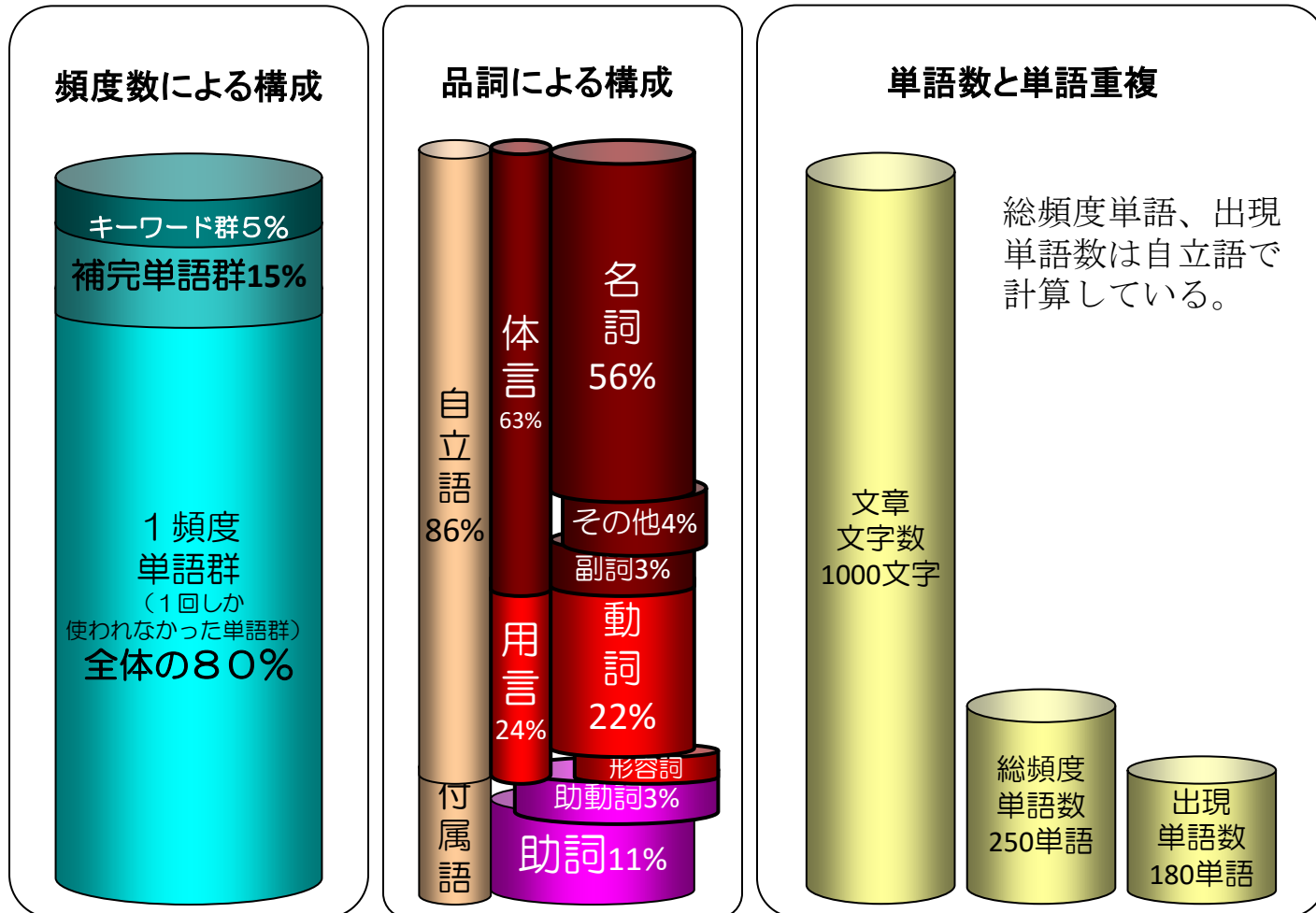
言葉を分析するには、基準が必要である。言葉を分析しようとしても言葉があるだけである。日本語とは何なのか、何を持って日本語とするのか、などと考え始めると袋小路に入りこんで出口を見出すこともできない。

模範の文章を探してみても、基準とするものがない。著名な人の文章、文豪と言われる人の文章を取り出そうとしても、もしかしたら、時代によって違うかもしれない。同じ時代でも考え方が違えば、文豪も違う。著名でなければ、日本語ではないのかと聞かれれば、ノーと答えるしかない。片言の語句を覚えた者が使う言葉も同じように日本語である。行き着いた所は、すべての文章、文節を集めて一つにすることだった。

収集できる限りの文章を集めて、ターゲットを求める。日本語としての基準が仮設定できる。一つの基準が作れば、さらに文章を追加しながら、文体定義をして、文章を分類し、作者の活動環境に合わせた基準が出来上がっていく。



文章分析結果 日本語の構造



いろいろな人の文章を、下手な人も上手な人、老若男女の文章を一括にして処理をすると、上図のような割合になる。これが、日本語の構造である。ところが、一つの組織、一つのグループを固まりにして、分析をすると、上図の比率が変わってくる。その変わった部分が組織に特徴になる。

言葉のあるがままをとらえる

言語分析時に文法を忘れてはならない事柄であるが、文法が最重要課題ではない。文法は表現の後追いであり、文法があって表現が成立したのではない。言葉は時代とともに変化する。日本語では10品詞があるとされるが、10品詞が固定されて、時代の変化に関わらず一定であるとは限らない。もちろん、品詞区分として固定されているが、単語が一つの品詞に限定されるはずもない。表現での使い方は様々で、違和感なく、言葉として通用すればよい。分析を文法から入ると矛盾する事柄が急増する。大切なのは、目の前にある言葉であって、すべての言葉、文章が分析対象となる。言葉を話す人、文章を表す人、すべてが表現の達人ではない。文法は表現の後追いなのだ。文法として成立したとき、既に文章構造は次の段階へと進んでいる。

1980年頃までは、言葉変化に時間がかかった。明治時代以前では、言葉が変化するのに1世紀以上要した。人々の移動、物の移動が自由になるに従って、言葉の変化は徐々に激しくなっていた。1995年、インターネットが普及し始めると、さらに変化は加速される。如何なる表現が伝えやすいかが中心になる。物だけを伝えるのではない。気持ちを如何に表すかが重要視された。

古来から、文章には起承転結があるとされた。結論が明確でなければならないとされた。その表現形式では、頭括式論述、尾括式論述、双括式論述がある。起承転結の文章の中で結論を表した位置で分類された。ところが、他にも、追歩式論述があり、列叙式論述がある。追歩式論述は結論が展開していく。一つの結論ではなく、複数の結論が存在し、入れ替わっていく。列叙式論述では、結論が存在しない。読者のイメージとしてとらえている。結論が無いのは間違いであるとするのが間違いとなる。

また、最近の多くの文章を見ると、結論が四段落形式の先頭または最後にあるとは限らず、二段落、三段落にくる場合もある。

媒体が変化し、増えてきた。一昔前までは、手書き原稿であり、活字に置き換える手順があった。その時点で文章が見直された。紙媒体が中心であった。今では、活版印刷自体が存在しない。紙を媒体に使うとも限らない。文字だけの表現でもない。読みやすさ、分かりやすさ、伝達スピードが要求される。

送り仮名、仮名と漢字の扱いで正しいとされる基準があるが、3年に一度見直されている。また、1文章での漢字とひらがな比率は、1:1.3とされているが、実態は1:1.7となっており、この比率は時代によって変化している。外来語が増えてくれば、カナが多くなるのは必然である。

文法は目安になるが絶対ではない。日本語文法の分類方法でも、国内で数種の学派があり統一されていない。

表現には、体言止めがある。倒置法がある。修飾節があり、並列表現がある。これらを考慮すると、文体が成立しにくい。SVOCなどの文体を中心に考えるとすれば、無数の文体が存在する。

日本語には助詞がある。助詞1文字と自立語が組み合わさって、表現の機微をイメージさせる。

日本語を表すには、一定の形式がある。体言と用言と付属語の比率がある。あらゆる文章をまとめて比率を求めれば、64:23:11となる。だが、この通りに表現されている文章は非常に少ない。この比率が変化して、文章のリズムを作り出す。このリズムが文章の個性を表し、伝達率に影響する。

分析対象になる文章の、表現の是非ではなく、あるがままに分析をする。

分解時の品詞群

普通名詞	1	普通名詞	1
		成語	2
		季語	3
		時期	4
		その他	9
固有名詞	2	人名	1
		社名	2
		地名	3
		国名	4
		元号	5
		歴史用語	6
		その他	9
代名詞	3	人称代名詞	1
		指示代名詞	2
		その他	9
数詞	4	年月日	1
		金額	2
		単位	3
		その他	9
副詞	5	状態副詞	1
		程度副詞	2
		陳述副詞	3
		その他	9
接続詞	6	順接	1
		逆説	2
		因果	3
		並列	4
		添加	5
		補足	6
		選択	7
		転換	8
		その他	9

連体詞	7		
感動詞	8	感動	1
		呼びかけ	2
		応答	3
		掛け声	4
		挨拶	5
動詞	9	自動詞	1
		他動詞	2
		一般動詞	3
形容詞	10		
助動詞	11	使役	1
		受身・尊敬・自発・可能	2
		打消し	3
		推量・意志・勧誘	4
		打消推量・意志	5
		過去・完了・存続	6
		希望	7
		丁寧	8
		様態	9
		伝聞	10
		比況・例示・不確定断定	11
		断定	12
		推量	13
		丁寧断定	14
助詞	12	格助詞	1
		接続助詞	2
		副助詞	3
		係助詞	4
		終助詞	5
		間投助詞	6
連語	13		

コードは品詞コード、サブ品詞コードの2種類を用意した。文章分解時にすべての単語に、2種類のコードが付く。

品詞コード1~5のサブ品詞の種類は、分析時に確実に区分できるもので、文意を定められる条件に当てはめられるものを設定した。

接続詞と付属語は一般に分類されている区分で表した。

左記以外に以下の品詞を設定している。

- ・感想単語 体言と用言
体言は「私」「弊社」など
用言は「思う」「感じる」「考える」など
- ・慣用語
「こと」「もの」など

文章分解項目

分解は次の三段階で行われる。

i

1	2	3	元文字数は、分析対象となった文章の文字数である。空白、記号、絵文字等々をすべて含めた文字数である。分解文字数は、空白、記号等を削除した後の文字数である。
元文字数	分析文字数	Sen数	

Sen:センテンス KW:キーワード

ii

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
体言数	全体名詞	普通・固有名詞	数詞を除く名詞	普通名詞	非分類普通名詞	成語	季語	時期	その他	固有名詞数	人名	社名	地名	国名	元号	歴史用語
18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
その他2	代名詞数	人称代名詞	指示代名詞	その他3	数詞	年月日	金額	単位	その他4	副詞数	状態	程度	陳述	その他5	接続詞数	順接
35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
逆説	因果	添加	並列	補足	選択	転換	その他6	連体詞	感動詞	感動	呼びかけ	応答	掛け声	挨拶	用言数	形容詞数
52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68
動詞	自動詞	他動詞	一般	付属語数	助動詞	使役	受身	打消し	推量1	打消推量	過去	希望	丁寧	様態	伝聞	比況
69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	ii は単語単位に分解される。単語別の頻度数がカウントされ、使われた単語の頻度総数と種類数の2種類で表される。					
断定	推量2	丁寧断定	助詞数	格助詞	接続助詞	副助詞	係助詞	終助詞	間投助詞	連語数						

iii

1	2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	i と ii の後、分析値を求める前の計算が行われる。				
計算文字数	1単語平均文字数	総頻度数	出現単語数	否定語数	否定ワケ	非不単語数	ない数	助動詞否定	感想単語	感想名詞数	感想用言数					
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
同義語数	反意語数	同頻度数	KW数	KW第1重複数	KW第2重複数	KW第3重複数	KW第4重複数	KW感想1	KW感想2	KW感想9	中心KW	補完単語数	補完感想1	補完感想2	補完感想9	中心補完語
28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38						
1頻度単語	1頻度単語感想1	1頻度単語感想2	1頻度単語感想9	中心1頻度	第1単語頻度	第2単語頻度	第3単語頻度	第4単語頻度	Sen単語値最大値	Sen単語値平均値						

分解項目の解説

分解する最小単位は単語である。その基準は品詞区分になり、単語種類になる。一つ一つの単語が基準になって、品詞に当てはめられ、カウントされる。品詞のカウント数、単語単位のカウント数(頻度数)である。

最初に文章の文字数がカウントされる。空白、記号を含めた書かれた時の文章の文字数である。次に記号、空白を削除した文字数がカウントされる。前の文字数を元文字数、記号削除後の文字数を分析文字数とする。報告文、論文等では、元文字数と分析文字数の差はほとんどない。メール文、SNS、ブログなど書かれた文章では差が生じる。この差を見るだけでも文章の性質が分かる。

品詞単位で単語の種類数と、単語単位の頻度数が計算される。1単語の頻度数よりも、品詞単位での単語の種類数が、分析では大きな役割をする。語彙量、類語、反意語の使い方、知識分野や思考構成の方法と程度を窺い知れる。

複数文章、または分野やテーマの異なる文章を比較できる分析でなければ、基準値が求められない。仮に求められたとしても、基準値が適切であるかの判断材料が得られない。如何なる文章であっても、同じ視点、同じ基準で、分析が得られなければならない。

日本語の文章は、漢字、仮名、カタカナ、アルファベットが混在する。日本語の単語の音は短く、外来語等のカタカナ語は音が長い。文章を構成する単語群の形状によって文字数が変化する。単語形状によって左右されない文章の文字数を計算しているのが、計算文字数である。計算文字数は、1単語平均文字数、総単語数から求められる。

日本語は、時制、推量、断定などは、助動詞で判断できる。内容の構成は、自立語である体言と用言で見分けられる。日本語には近似文がある。近似文は1文から助動詞、助詞を除いた文で、およその意味を表せる。主語は助詞によって設定されるが、主語の概念が乏しく、主体と客体で区分される。用言ではサ変動詞があり、「育成する」などの名詞と「する」が合体して動詞となる。複合化されたサ変動詞は1単語としてカウントされる。

カウントの方法が2種類あって、一つが総頻度数、他が単語種類数である。すべての品詞でカウントされるが、近似文を構成する自立語が主な分析値を構成している。総頻度数は出現した自立語の総数である。単語種類数は、使われた単語の種類の数である。総頻度数と単語種類数の比率は、1単語の平均重複率を表す。

使われた単語がすべて異なる頻度数にならず、同じ頻度の単語がいくつもある。同じ頻度の単語種類数を表したのが同頻度数としている。

『分解項目』の ii から iii の間で単語重量値の計算がされる。同頻度数と1単語の頻度数、計算文字数で計算され、キーワード群、補完単語群、1頻度単語群に分類される。単語重量値は『基本分析機能1』に記載している。

分析辞書には、体言辞書、用言辞書、類語辞書、反意語辞書がある。1文章で使われた、類語、反意語が単語重量値と共に抽出される。類語、反意語は、語彙量等の計算に用いられている。また、作者を特徴づけたり、テーマに対しての領域を明らかにするために活用される。

センテンス単語値平均値は、1センテンス内で使われた自立語の単語重量値の平均を示している。キーワード群と、このセンテンス単語値平均値がキーセンテンスを求める参考になる。

分析値計算

	比率	補正比率	分析値	補正分析値	比率	補正比率	分析値	補正分析値	比率	補正比率	分析値	補正分析値	比率	補正比率	分析値	補正分析値	比率	補正比率	分析値	補正分析値
補正值	1.3292	5		0.5	1.8803	5		0.5	0.0661	5		0.8849	50.181	5		0.7527	47.469	5		2.4941
STD	0.0223	0.0297	0.1484	0.2968	0.0425	0.08	0.4	0.8	2.6757	0.177	0.8849	1	0.003	0.1505	0.7527	1	0.0105	0.4988	2.4941	1
AVE	0.7522	0.9999	4.9995	4.999	0.5292	0.9951	4.9755	4.9511	15.535	1.0275	5.1375	5.1554	0.0198	0.9955	4.9774	4.9699	0.0226	1.0709	5.3543	5.1421
	総頻度比率				出現単語比率				センテンス比率				同頻度数比率				キーワード比率			
朝日	0.7285	0.9684	4.8	4.7	0.4961	0.9328	4.7	4.3	13.4604	0.8903	4.5	4.4	0.0192	0.9621	4.8	4.7	0.0240	1.1376	5.7	5.3
産経	0.7429	0.9875	4.9	4.9	0.5837	1.0976	5.5	6.0	19.9529	1.3197	6.6	6.8	0.0177	0.8876	4.4	4.2536	0.0147	0.6997	3.5	4.4
日経	0.7830	1.0408	5.2	5.4081	0.5757	1.0826	5.4	5.8258	13.9570	0.9232	4.6	4.5658	0.0205	1.0273	5.1	5.2	0.0179	0.8503	4.3	4.7
毎日	0.7631	1.0144	5.1	5.1	0.5262	0.9895	4.9	4.9	15.1372	1.0012	5.0	5.0	0.0182	0.9145	4.6	4.4	0.0251	1.1895	5.9	5.4
読売	0.8438	1.1216	5.6	6.2	0.5124	0.9635	4.8	4.6	20.9090	1.3830	6.9	7.2	0.0273	1.3714	6.9	7.5	0.0444	2.1081	10.5	7.2
AVE	0.7522	0.9999	4.9995	4.9990	0.5292	0.9951	4.9755	4.9511	15.5347	1.0275	5.1375	5.1554	0.0198	0.9955	4.9774	4.9699	0.0226	1.0709	5.3543	5.1421
STD	0.0223	0.0297	0.1484	0.2968	0.0425	0.0800	0.4000	0.8000	2.6757	0.1770	0.8849	1.0000	0.0030	0.1505	0.7527	1.0000	0.0105	0.4988	2.4941	1.0000
MAX	0.8438	1.1216	5.6080	6.2159	0.6406	1.2046	6.0228	7.0456	23.5961	1.5607	7.8036	8.1682	0.0278	1.3931	6.9657	7.6114	0.0447	2.1224	10.6119	7.2501
MIN	0.6854	0.9111	4.5554	4.1109	0.4185	0.7869	3.9343	2.8685	10.4173	0.6890	3.4451	3.2429	0.0108	0.5395	2.6973	1.9409	0.0028	0.1329	0.6644	3.2617
AV-ST	0.7299	0.9702	4.8511	4.7022	0.4867	0.9151	4.5755	4.1510	12.8589	0.8505	4.2526	4.1554	0.0168	0.8449	4.2246	3.9699	0.0121	0.5720	2.8602	4.1421
AV+ST	0.7746	1.0296	5.1479	5.2958	0.5718	1.0751	5.3756	5.7511	18.2104	1.2045	6.0224	6.1554	0.0228	1.1460	5.7301	5.9699	0.0331	1.5697	7.8484	6.1421

	比率	補正比率	分析値	補正分析値	比率	補正比率	分析値	補正分析値	比率	補正比率	分析値	補正分析値	比率	補正比率	分析値	補正分析値	比率	補正比率	分析値	補正分析値
補正值	12.717	5		1.1695	2.6302	5		0.6224	152.19	5		2.6384	40.192	5		1.4787	53.9	5		1.201
STD	0.0184	0.2339	1.1695	1	0.0473	0.1245	0.6224	1	0.0035	0.5277	2.6384	1	0.0074	0.2957	1.4787	1	0.0045	0.2402	1.201	1
AVE	0.0785	0.9989	4.9947	4.9954	0.3779	0.9941	4.9703	4.9523	0.0076	1.1553	5.7767	5.2944	0.0259	1.041	5.205	5.1387	0.0191	1.0321	5.1603	5.1335
	補完単語比率				1頻度単語比率				第3単語重複率				第1単語頻度比率				第2単語頻度比率			
朝日	0.0671	0.8534	4.3	4.4	0.3283	0.8636	4.3	3.9	0.0097	1.4705	7.4	5.9	0.0192	0.7706	3.9	4.2	0.0168	0.9042	4.5	4.6
産経	0.0737	0.9373	4.7	4.7	0.4334	1.1399	5.7	6.1	0.0101	1.5373	7.7	6.0	0.0177	0.7109	3.6	4.0226	0.0147	0.7945	4.0	4.1
日経	0.0972	1.2366	6.2	6.0115	0.4325	1.1374	5.7	6.1040	0.0044	0.6764	3.4	4.3868	0.0256	1.0285	5.1	5.1	0.0205	1.1034	5.5	5.4
毎日	0.0843	1.0719	5.4	5.3	0.3349	0.8808	4.4	4.0	0.0043	0.6588	3.3	4.4	0.0205	0.8240	4.1	4.4	0.0182	0.9823	4.9	4.9
読売	0.0957	1.2164	6.1	5.9	0.3280	0.8626	4.3	3.9	0.0067	1.0146	5.1	5.0	0.0273	1.0984	5.5	5.3	0.0239	1.2889	6.4	6.2
AVE	0.0785	0.9989	4.9947	4.9954	0.3779	0.9941	4.9703	4.9523	0.0076	1.1553	5.7767	5.2944	0.0259	1.0410	5.2050	5.1387	0.0191	1.0321	5.1603	5.1335
STD	0.0184	0.2339	1.1695	1.0000	0.0473	0.1245	0.6224	1.0000	0.0035	0.5277	2.6384	1.0000	0.0074	0.2957	1.4787	1.0000	0.0045	0.2402	1.2010	1.0000
MAX	0.1194	1.5183	7.5916	7.2160	0.5244	1.3794	6.8969	8.0476	0.0218	3.3230	16.6150	9.4023	0.0487	1.9582	9.7909	8.2400	0.0326	1.7546	8.7732	8.1417
MIN	0.0377	0.4788	2.3941	2.7718	0.2572	0.6764	3.3821	2.4006	0.0029	0.4463	2.2316	3.9507	0.0108	0.4321	2.1604	3.0796	0.0081	0.4346	2.1729	2.6460
AV-ST	0.0602	0.7650	3.8251	3.9954	0.3306	0.8696	4.3479	3.9523	0.0041	0.6277	3.1383	4.2944	0.0185	0.7453	3.7264	4.1387	0.0147	0.7919	3.9593	4.1335
AV+ST	0.0969	1.2328	6.1642	5.9954	0.4253	1.1186	5.5928	5.9523	0.0111	1.6830	8.4151	6.2944	0.0333	1.3367	6.6837	6.1387	0.0236	1.2723	6.3613	6.1335

分析値の種類

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
総頻度比率	出現単語比率	総出	センテンス比率	同頻度数比率	センテンス否定率	キーワード比率	補完単語比率	1頻度単語比率	中心キーワード比率	中心補完単語比率	中心1頻度単語比率	第3単語重複率	第1単語頻度比率	第2単語頻度比率	第3単語頻度比率	第4単語頻度比率
18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
体言率	全体名詞率	普通固有名詞率	除数詞名詞率	普通名詞率	非分類普通名詞率	副詞比率	用言比率	形容詞比率	動詞比率	付属語率	助動詞率	助詞率	センテンス頻度最大値	センテンス頻度平均値	センテンス用言率	単語回帰値

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
体言率	用言率	付属語率	テーマ設定力	テーマ説明力	テーマ補足力	文章整備力	単語構成力	センテンス構成力	センテンス主張力	行動表現力	主張構成力	論理展開力	主張力	主張補足力	論理強制力	平均
18	19	20	21													
SD	MAX	MIN	MAX-MIN													

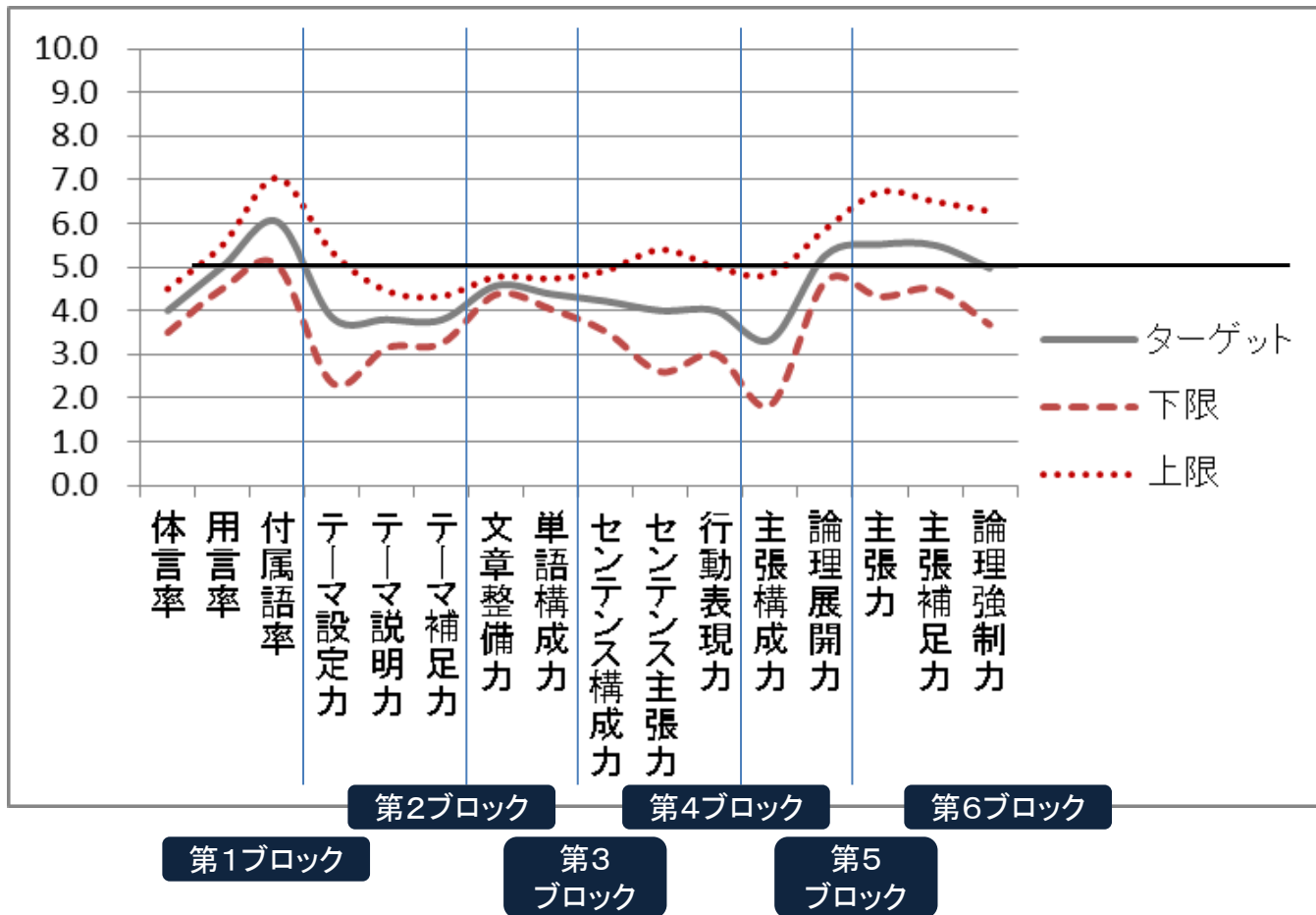
分析値は、異なる文章でも同じ様に見比べられるように計算している。統計でのターゲットを求めるのと同じAV±2SDの計算方法を使うが、言語分析では、2SDではなく、1SDで計算している。AV±SD内の平均をターゲットとした。

分析値は、比率、補正比率、分析値、補正分析値と計算される。補正比率は、比率中央値が1になるように計算し、分析値の適正値を5に設定している。分析補正値は、各分析値が正規分布するように計算されている。補正分析値が求められるまでに3つの乗数が求められて、この乗数が固定されている。乗数は、半年に1度計算され、表現変化の指標になっている。

2014年現在で、分析値は34種類が設定されている。その中で凡そ常に正規分布を示し、文章の性質を固定できる分析値を選んでいる。それが、16分析値となっている。

各分析値は、分析値の種類単位でターゲットを求めている。基準値(理想値)を5としているが、その理想値は分析項目単位で計算されているので、16分析値のすべてが5.0になる文章が現される確率は非常に低い。

文章の心電図



●分析値5.0が基準となる。評点として100点満点で表すとすれば、5.0が100点となり、5.0から離れていくに従って点数は下がっていく。分析値0と10.0は100点満点にすると0点となる。

●左グラフのターゲット分析値は、読みやすく、分かりやすい文章の分析値を表している。
●上限と下限は、ブレ範囲を表す。

6のブロックは分析値の計算方法によって分類している。一つのブロックは同じ計算方法を用いている。第1～第3ブロックは文章作者の基本となる傾向を表している。第4～第6はテーマによって変動しやすい。

分析値16項目の説明1

分析値16項目は計算方法や扱う単語群の性質によって6ブロックに分類しています。

【体言率】－第1ブロック

◆全体の文章の大きさに対して、体言が多くなってくると、考える材料が増えており、内容が複雑になります。少なくなると、単純に見えてきます。◆日本語文法では、体言は、名詞、副詞、接続詞、感動詞、連体詞が当てはまります。文法書によっては、名詞のみを体言と言っている場合もありますが、文道では、活用しない自立語全体を示しています。

【用言率】－第1ブロック

◆気持ち、行動、感想などを表す単語の種類を用言と言います。動詞・形容詞を示しています。1センテンスの文字量を減らすと用言率が増えます。◆1センテンスが短くなると、歯切れが良いように感じます。◆用言は、する・です、という単語ではなく、具体的な意味を持つ単語は、書く、取る、伝える、行く、食べる、果たす、持つ、読む、楽しい、怒る、美しい、大きい、などです。具体性を示す単語群を意識するようにしてください。文章がはっきりとして、分りやすくなります。

【付属語率】－第1ブロック

◆付属語は難しいですが、気持ちをつなぐ単語だと思ってください。この使い方で、貴方の気持ちが伝わります。規則的な使い方をすると、冷たく感じます。単調になります。いかに豊富に適切に使うかが、人を動かすポイントになります。◆「テニヲハ」などが助詞で「せる・させる、れる・られる、ようだ、ない、たい、ます、みたいだ、です、らしい、だ、」が助動詞です。これらの使い方で、人間性が分ることもあります。

【テーマ設定力】－第2ブロック

◆もっとも言いたいことの中となる単語群を示しています。計算では、その単語の種類数を表しています。◆文章の中から、名詞、動詞、形容詞をひっぱりだし、文章の中で、テーマの中心となる単語群を抽出しています。全体の名詞、動詞、形容詞の約4%に当る単語群になります。◆主張しようとする範囲や主張の強さの程度によって、この比率は変化しています。◆文章で表された中心となっている単語の種類が、日常の習慣で使っている単語群になっています。気をつけてください。

【テーマ説明力】－第2ブロック

◆最も言いたいことがあって、その言いたいことを、掘り下げ説明している単語群を示しています。掘り下げて説明すると、意味を限定、絞り込んでいる場合もあります。◆テーマの中心となる1単語に対して、2～4単語が必要です。◆これらの単語群は名詞、動詞、形容詞になります。◆この力は、日常の考え方や行動から習慣になっています。相手に対しての気持ちの丁寧さを示していると考えてください。

【テーマ補足力】－第2ブロック

◆文章表現の役割として、意志の伝達のための舞台装置みたいなもので、必要不可欠な部分です。この部分で文章全体のイメージを作りだしています。命令口調の多い人は、この分析値は小さくなります。◆名詞、動詞、形容詞の範囲で、テーマ補足力の単語の割合は、全体の80%を占めています。◆伝達姿勢で、貴方の気持ちの丁寧さを示しています。◆この表現量と丁寧さは、互いによく理解している相手、方法論や説明は不要だと思っている相手、能力を信頼しテーマだけの伝達で良いと思っている相手、などには、少なくなってきました。

【文章整備力】－第3ブロック

◆日本語を表現する上で、最も基本的な項目です。意味を持っている単語と、単語それ自体で意味を持っていない単語(付属語)の構成比を表しています。◆日本語を日常使っていると(読む、書く、話すなど)、ほぼ適性値になってきます。大きく外れることはほとんどありません。◆いかなる文体(論文、小説、エッセイなど)であっても、同じ分析値に集約します。

分析値16項目の説明2

【単語構成力】－第3ブロック

◆使っている単語の種類数です。全体の文字量と、使われた単語の種類数を組み合わせは、伝達する姿勢、伝達の方法などに関わっています。分析値が大きくなると、同じ単語を使っている重複率が小さくなり、単語の種類数が増えてきます。小さくなると、その逆になります。◆文章を分析した結果で、初めて分析値が高い・低いに分るもので、意識をして分析値を変えることは困難です。

【センテンス構成力】－第4ブロック

◆いろいろな文字数のセンテンスがありますが、その中で使われている、名詞、動詞、形容詞の単語の強さ(単語重量値)の合計を、1センテンス当りの平均で表しています。表現全体の印象に関わってきます。◆主張したい意味の中心となる単語群に注意して表現してください。

【センテンス主張力】－第4ブロック

◆センテンスの中で、主張のもっとも強いセンテンスを、分析値に直した値です。計算は名詞、動詞、形容詞の単語重量値合計です。1センテンスの文字量が多くなると値は大きくなります。しかし、センテンスの文字量が多くなると、体言率や用言率に影響し、文意の伝わり方が悪くなります。文章の表現は適切な文字量で表現されていて、それらの中で、もっとも単語重量値合計の大きいセンテンスの値です。

【行動表現力】－第4ブロック

◆1センテンスで適度な用言量が必要です。文章全体で用言が多くなると意見を押し付ける傾向が出てきます。少なくなると、目的が不明瞭になってきます。用言の使い方相手への認識の特徴が現れます。◆特殊な表現でなければ、1センテンスに、1つの用言は必ず含まれます。その用言の、1センテンスに含まれている比率を分析値で表しています。

【主張構成力】－第5ブロック

◆1つのテーマを1つの要素で展開するか、複数の要素で展開するかを抽出しています。テーマについての主張要素が多くなれば、内容が難しくなります。◆1つのテーマについて、1つの要素で主張する方が分りやすく、表現しやすいですが、多くの場合1つで済むことはほとんどありません。この程度を表しています。

【論理展開力】－第5ブロック

◆主張したいことの強さ、しつこさ、表現の丁寧さのバランスを表しています。文章全体で使われた文字数があり、その数の中で表現が完結しています。丁寧に論旨を展開していくか、表現の強さで、表現の面白さが変わります。◆表現するときの気持ちによって、分析値が変わってきます。表現している人の姿勢が見えてきます。

【主張力】－第6ブロック

◆最も言いたいことの中心になっている単語の強さを表しています。◆この単語の存在がはっきり分るときと、曖昧なままで表現されている場合があります。曖昧になっているときは、主張が明確になっていません。逆に、強く出ている場合は、こだわりが現れます。◆この単語の役割は、考える、話を進めていく、軸のようなものです。

【主張補足力】－第6ブロック

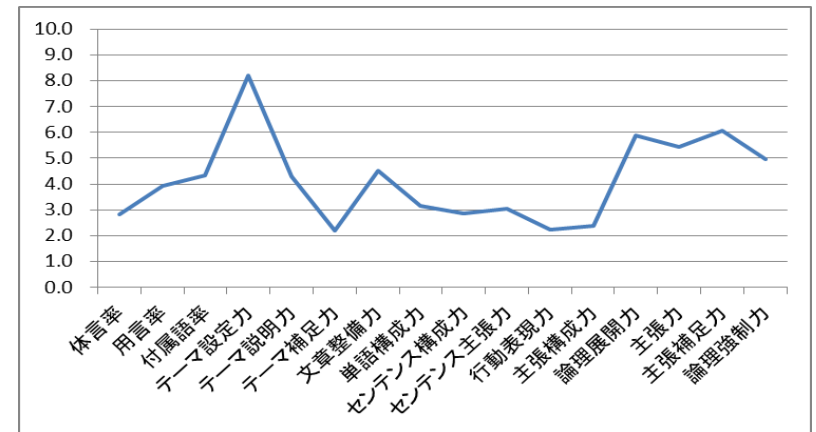
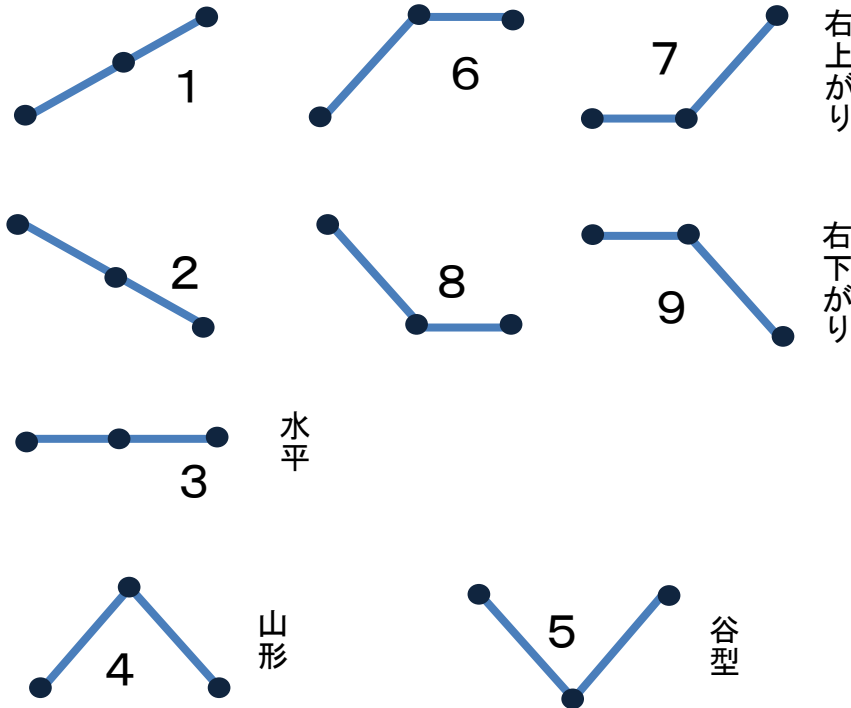
◆主張力の単語に対して、その次に強い単語群です。主張力で表される単語は、1単語であることが多いですが、2番目の単語は複数が多く、複数であることの方が、意味が通りやすくなります。論旨の展開に広がりがあります。◆主となる単語と次の単語の相関がしっかりと取れていないと上手く伝達できなくなります。単語の意味について、自身の定義の丁寧さ深さによって変わってきます。

【論理強制力】－第6ブロック

◆主張したい単語群の強さの流れを回帰値で表し、論旨展開の強さをみています。回帰値の傾きが大きくなると、性急さが強くでてきます。◆より丁寧な説明をすると、この分析値は下がり、大まかに論旨を展開していくと、分析値は上がっていきます。

形状コード

	第1ブロック			第2ブロック			第3ブロック		第4ブロック			第5ブロック		第6ブロック		
	体言率	用言率	付属語率	テーマ設定力	テーマ説明力	テーマ補足力	文章整備力	単語構成力	センテンス構成力	センテンス主張力	行動表現力	主張構成力	論理展開力	主張力	主張補足力	論理強制力
分析値	2.8	3.9	4.3	8.2	4.3	2.2	4.5	3.2	2.9	3.0	2.2	2.4	5.9	5.5	6.1	5.0
隣形状		1	1	1	2	2	1	2	2	3	2	3	1	2	1	2
項目形状			1			2		2			9		1			4



16分析値を折れ線グラフに表すと上グラフになる。
 16分析値は、計算方法によって6ブロックに分類されている。前の3ブロックのグラフ形状は人によって固定されやすい。後3ブロックはテーマの習熟性、主張への期待レベルによって変化する。だが、共に個人の特徴を表すのは変わらない。
 グラフ形状を数値に置き換えたのが形状コードである。コードの種類は左例のように9種類ある。グラフ形状と分析値で(折れ線の角度)で表現形態、思考形態を表す。個人の形状変化は、知識変化、心情変化があった時に現れる。

乗数変化

下に示したグラフは2001年から2010年6月までの各分析値の乗数変化グラフである。元になっているのは全国紙5紙の社説から計算されている。社説がその時代のテーマを扱い、表現が規定に従い、常に一定の表現レベルで書かれている。年月とその年月に起こっている問題等を比較してみると社会思考状態が伺える。

